

農林水産大臣賞受賞

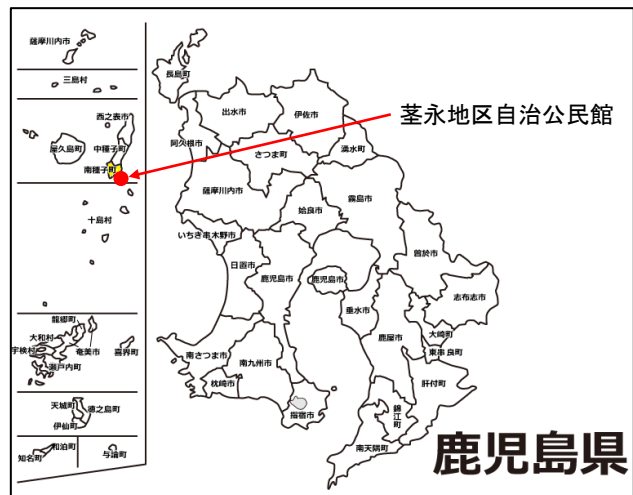
古から未来へつなぐむらづくり

くきなが ち く じ ち こうみんかん
受賞者 荃永地区自治公民館
(くまげぐんみなみたねちょう
鹿児島県熊毛郡南種子町)

■ 地域の沿革と概要

南種子町は、種子島の南端に位置し、「鉄砲伝来」の地として歴史的な由来のある町である。町の基幹産業は農業で、安納いも、さとうきび、早期水稻など、温暖な気候と恵まれた広大な農地を活かして多彩な農作物が生産されている。

第1図 位置図



■ むらづくりの概要

1. 地区の特色

荃永地区は、町の南東部に位置し、約 160ha の広大な水田が広がり、豊かな自然や緑に恵まれた美しい農村地帯である。10 集落で構成され、人口 405 人で、早期水稻や飼料用稲、かぼちゃ等の園芸作物などが栽培され、兼業農家が多数を占めている。

また、全国で3箇所しかない古代米「赤米」伝承の地として、赤米御田植祭等の伝統神事を継承する取組を通じて住民同士の絆や強い郷土愛を育む地区である。

さらに、地区内には日本最大のロケット発射場である「JAXA種子島宇宙センター」があり、歴史と未来が共存する魅力ある農村地帯である。

2. むらづくりの基本的特徴

(1) むらづくりの動機、背景

ア 水田の荒廃化の危機感

当地区は、昭和 12 年に町内でも先駆けて早期水稻の栽培が始まり、「日本一早いコシヒカリ」の産地として栄えてきた。しかし、米の生産調整や消費量減少により、米価が低下に転じ、米づくりを断念する人も出てきたため、「このままでは水田の荒廃化や地区の若者の農業離れが

進む」との危機感が漂ってきた。

このため、水田を有効利用した今後の農業生産について話し合いが行われ、米オンリーの農業から転換すべく園芸作物や畜産農家と連携した飼料用稲の導入、担い手への農地集積などの取組が始まった。

イ 中学校廃校による子育て世代の減少の危機感

当地区では、高度経済成長期以降、若年層を中心に多くの住民が都市部の就職などにより、人口減少が進行した。平成6年3月には地区の中学校が廃校となり、「小学校だけでも存続させないと地区に子育て世代の若い人がいなくなる」との危機感が漂ってきた。

この状況を打開するため、関係団体等が連携し、平成8年4月「宇宙留学」の受入に町内で先進的に取り組み、現在のむらづくり活動につながるものとなっている。

ウ 赤米神事の伝承継続の危機感

当地区では、宝満神社の祭神「玉依姫」が海宮より赤米の種子を持ち帰り、種子島で稲作を始めたと言われる「赤米伝説」が語り継がれており、この赤米を通じて、地区住民の連帯感を深め、文化を創造し、生活を発展させてきた。

平成になると、過疎化がさらに進み、「赤米神事が伝承できなくなる」との危機感とともに、「次世代に継承しないといけない」という使命感も漂い始めた。

これを受け、平成11年に「ミニ独立村赤米のふるさと千石村」を結成し、赤米を通じた地域おこしが始まった。

以上の3つの「危機感」が契機となり、地区一体となったむらづくり活動が進んでいった。

(2) むらづくりの推進体制

ア 荃永地区自治公民館の組織体制

荃永地区自治公民館は5つの専門部（総務部、文化部、産業部、青少年育成部、体育部）で構成され、地区内の各種団体代表で構成する運営委員会と連携し活動している。

また、話し合い活動は、年1回の総会をはじめ、運営委員会を年3回、10集落館長と地区役員との集落館長会を毎月開催している。



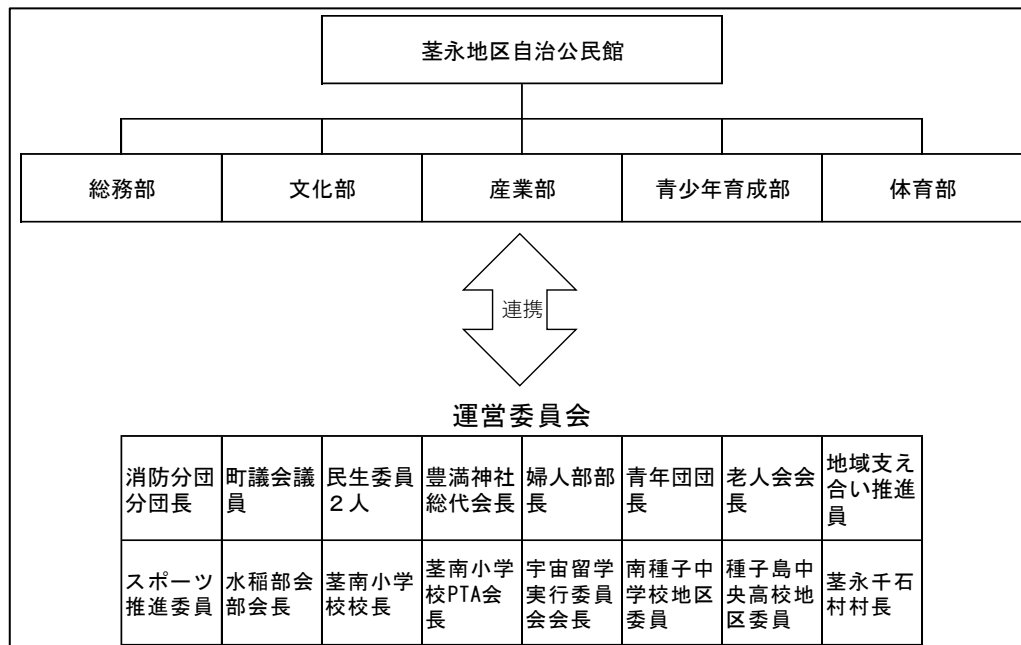
写真1 公民館での話し合い活動

イ ワークショップによる住民の合意形成

住民の合意形成を図るため、地区のマップを活用したワークショップ手法による話し合いを行っている。住民の抱える各分野（農業面・生活面・環境面）の課題を抽出し、それらをマップに反映し、改善策やアイ

デアを検討し、実践している。

第2図 むらづくり推進体制図



■ むらづくりの特色と優秀性

1. むらづくりの性格

「宇宙」と「赤米文化」という未来と歴史のロマンが共存する魅力ある地区として、住民が地区に自信と誇り、愛着心を持っており、住民同士の強い絆のもと、自主的で持続的なむらづくり活動を展開してきている。

高齢化や人口減少が急速に進む地区に危機感を感じる中、水稻オンリーの農業から脱却すべく園芸作物や耕畜連携に取り組むとともに、長年進まなかった農地集積も実現した。

また、むらづくりの話し合いを基に、地域資源や人に光をあて、宇宙留学の受入、赤米の特産品化や伝統神事の継承活動、高齢者への見守り活動や環境保全活動など、住民が一体となり、地域活性化につなげている。

2. 農業生産面における特徴

(1) 米オンリーから「園芸作物へのチャレンジ」

米価の下落等による水田の荒廃化や地区の若者の農業離れに対する危機感から、農家のリーダーや地権者等が中心となり、農地マップを活用し、現在の経営状況や今後の意向等を確認し、今後の農業のあり方や品目選定などを検討した。

その結果、米作だけではなく、水田裏作としてかぼちゃ、きぬさや、実えんどう、そらまめ等の輸送園芸作物の導入による水田農業の収益アップへの取組が始まり、地区の若者を就農・定住させる大きなきっかけとなった。

(2) WinWinの「耕畜連携の仕組みづくり」

「省力的に栽培できる飼料用稲を導入し、水田の荒廃化を解消できないか」との意見が出されたが、地区内には畜産農家がないことから、地区の水稲農家が飼料用稲を育て、地区外の畜産農家が大型機械を利用し、収穫する仕組みを検討し、平成14年度には県内で先駆けて「耕畜連携による飼料用稲栽培」の取組が始まった。この仕組みの構築により、離島のハンデであった畜産農家の購入粗飼料費のコスト低減にもつながった。

この取組を機に、町内に飼料用稲の栽培が広がり、栽培面積は令和3年度に227haまで拡大した。また、町内母牛頭数も平成19年度の1,575頭から令和3年度に1,854頭まで増加するなど、町内の多頭飼育農家の育成や畜産業の振興にも寄与している。

(3) 自分たちの将来の農地を考える「担い手への農地集積」

園芸作物導入や耕畜連携の取組を進める一方で、高齢化は着実に進むため、農地の現状と10年後の危機的状況を農地マップで「見える化」した。

このことにより、農地保有意識の高かった住民にも、担い手への農地の集積・集約化の必要性が認識され始め、基盤整備事業の検討が始まった。平成30年度には、大区画化・農道・用排水路整備を行う基盤整備事業が開始され、令和2年度の当地区の担い手への農地集積率は67%（73haのうち50ha集積）となり、地区の農地を皆で守り、営農や耕作放棄地対策に取り組む体制が構築されてきている。

さらに、令和4年1月に地区の水稲栽培の受け皿となる農業法人も設立された。

年度	農用地面積 (ha) A	担い手の農用地 集積面積 (ha) B=C+D	担い手の農用地 利用状況		農用地面積に 占める担い手 の利用集積率 (%) B/A
			担い手の 所有面積 (ha) C	担い手の使用 収益権面積 (ha) D	
H29	73.8	28.43	13.05	15.38	38.5
R2	73.8	49.81	19.68	30.13	67.5

3. 生活・環境整備面における特徴

(1) 宇宙留学の受入による「移住・定住の促進」

中学校の廃校に伴い、「小学校は存続させないといけない」との危機感から、当地区の荃南小学校は「宇宙留学制度」を町内で最初に始めた。

自治公民館とPTA、地域の各団体長等が連携し、制度の意義や募集方法、受入れ家庭など、具体的な話し合いを何度も行って実現化し、平成8年度のスタートから令和4年度までの27年間で255名を受け入れている。

留学終了後は、住民が空き家を紹介し、移住・定住のための助言を行っている。

これらの取組により、地域のあり方に共感し、「茎永地区で子どもを育てたい」、「茎永で暮らしたい」という I ターン・U ターン者が定着するとともに、茎南小学校の児童数減に歯止めがかかるようになった。

【茎南小学校の児童生徒数の推移】

年度	H 29	H 30	R 1	R 2	R 3
児童生徒数	27	30	33	42	36

【茎永地区の移住者数・定住者数の推移】

年度	H 29	H 30	R 1	R 2	R 3
移住・定住者数	0	0	2	4	3

（２）「赤米」の伝統神事伝承と地域おこし

過疎化の進行により、「赤米」の伝統神事の伝承への危機感と使命感から、当時の公民館長が、赤米を通じた地域おこしに志をもつ有志を募り、平成 11 年に「ミニ独立村赤米のふるさと千石村」を結成した。この組織が中心となり、平成 12 年、国内の赤米伝承 3 地区（当地区、長崎県対馬市、岡山県総社市）が一堂に会した「赤米サミット」を開催し、赤米を通じた地域おこしが始まった。

平成 26 年度には当地区で 2 回目となる「赤米サミット」を開催し、これを契機に、地域の女性達が一致団結し、「赤米つのまき」等の特産品開発を行った。「赤米つのまき」は、地区の伝統行事やイベントでふるまわれるようになり、赤米の認知度向上が図られるとともに、女性のアイデアや知識・技術を生かす場として、女性リーダーの育成や若い世代への伝承につながっている。

また、赤米の伝統神事の御田植祭や収穫祭などを青年団や子供達を含めた地区全体で行い、赤米伝統神事が途絶えないように取り組んでおり、平成 28 年 3 月には「宝満神社の赤米御田植祭」が国重要無形民族文化財に指定されるなど、伝統神事を次世代に継承する取組として評価されるようになった。



写真2 赤米御田植祭「御田舞舞」



写真3 子供達と「赤米の餅つき」

（３）助け合いの精神「高齢者を地域ぐるみで支える仕組みづくり」

生まれ育った集落で安心して暮らせる地域づくりを目指し、平成 28 年度に「地域支え合い協議会」を設立し、独居高齢者へ「今日も元気です」と記載した黄色い旗を配布し、毎日玄関先に掲げてもらう取組を行っている。

また、高齢者の生きがいつくりや外出機会の創出のため、草切節・めでた節などの民謡伝承活動を行うとともに、体操教室や若手ボランティアグループとの食事会を開催するなど、高齢者を地域ぐるみで支える体制づくりに取り組んでいる。



写真 4 高齢者の見守り「旗立て」

(4) 地域住民共同による「環境保全活動」

「自分達の地区は自分達で住みやすくしよう」という相互扶助の精神のもと、地区の中心を流れる宮瀬川の堤防の草刈や道路清掃、公民館周辺の花植えなど、地区内の環境保全活動を長年にわたり、住民達による自主的な取組として行っている。

これらの取組が高く評価され、県河川愛護運動表彰など、保全活動に関する表彰を多数受賞している。



写真 5 住民による保全活動

(5) 「荃永郷土誌三十年のあゆみ」の発刊

荃永の魅力や歴史・文化を後世に伝えるため、「荃永郷土誌三十年のあゆみ」の編纂に平成 22 年から 6 年間かけて取り組み、平成 28 年 7 月に自主財源で発刊した。郷土誌は 205 頁のカラー刷りで、住民達の郷土愛を感じさせる内容であり、歴史や文化、出来事を共有できる大切な書物となっている。

また、荃南小学校の子ども達に贈呈するなど、地域を守り、受け継ぐ世代にとっての教科書となっている。



写真 6 荃永郷土誌